

イギリス、メイ新内閣が発足

6/23の国民投票でEU離脱を選択したイギリスで、テリーザ・メイ内務大臣はキャメロン前首相の退陣を受けて、7/9に与党保守党内で行われた首相選挙で首相に選出された。7/13にバッキンガム宮殿を訪問、エリザベス女王から正式に首相に任命されメイ新首相（59歳）が誕生した。その直後に、10 Downing Streetの首相官邸前で就任の所信表明を行った。



10 Downing Street の首相官邸前で多くの報道陣を前にして、所信表明するメイ新首相（写真出所：BBC）

所信表明の内容の概略は、以下の通りである。

「私は、キャメロン前首相の下でイギリス経済を安定させ、財政赤字の削減に努め、国民に仕事の機会を多く作って来た。キャメロン前首相の功績の一つに社会正義がある。低所得者の所得税の免除や同性婚の承認等、様々な政策を打ち出し、国民が一つにまとめられる様に努力して来たことである。私も彼の考えを踏襲して行く所存である。これは、連合や統合を信じると言う意味でもある。イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの繋がりを信じると言うことは連合王国のそれぞれの国を信じること、つまり国民全員のつながりを信じると言うことである。国民一人一人がどこ出身であっても私たちは繋がっているのである。貧困の家庭で生まれ育った場合、平均で9年の寿命が短くなるなどの不正義を正して行くことである。白人よりも黒人が司法制度で厳しく扱われたり、労働者階級の子供だと大学進学の可能性が低いこととか、公立学校で学んだ子供の方が私立学校で学んだ子供より将来良い仕事に就きにくいとか、女性は男性より同じ仕事でも給料が低いとか、精神病患者の介護が不十分だったりとか、若い人の持ち家が困難だったりとか、どんな事でも全てのイギリス人が平等の恩恵を受けられる様に国が機能し、こうした不正義を正して行くだけではなく、労働者階級の暮らし向きは決して楽ではなく、仕事があってもその仕事がいままで続くか心配だし、住宅を買ってもそのローンが払えるのか心配が絶えないはずである。私はできる限り直接に多くの国民と話しをして行きたいと思っている。私の内閣は、特権的な少数の利益を追及するのではなく、国民一人一人の利益の為に私

は働くつもりである。国にとって重大な決断をする際には、富裕層のためではなく国民の立場で考える、法律を作る時も有力者ではなく皆さんの意見を聞き、税金については富裕層ではなく、皆さんを減税や控除で優先して行きたい。私たちは今、この国の歴史的な瞬間に立ち会っており、国民投票の結果、国が大きく変わろうとしている。我々のグレート・ブリテンは、EUを離脱するが、我々は世界で新しい前向きな役割を造りあげられると確信している。さらに、イギリスを特権階級のために機能する国ではなく、国民一人一人のために機能する国にすることである。それが、私の内閣の使命である。皆さんと一緒により良いイギリスを造り上げていこうではありませんか。」(7/13のBBC TVより抜粋)

メイ新首相の所信表明は、1979年に初の女性首相として54歳で就任したサッチャー元首相を彷彿させる分りやすい、歯切れの良い明快な口調での所信表明であった。

早速、発表された組閣人事の主だったところでは、国民投票でのキャンペーンスタートの直前に残留派を率いていた盟友キャメロン首相と袂を分かち結果となり、残留派から離脱派に鞍替えし、キャンペーンを率いたジョンソン前ロンドン市長(52歳)を外務大臣に、新設のEU離脱担当大臣には、離脱派のデービス下院議員(67歳)が、同じく新設の国際貿易担当大臣には離脱派の元国防大臣のフォックス下院議員(54歳)を起用し、EU離脱交渉にのぞむ強力な布陣となっている。

EU政府側も、EUのトウスク大統領やドイツのメルケル首相やフランスのオランド大統領もイギリス側の移民を制限するための入国審査の強化と、EU単一市場へのフリーアクセスと言う「いいとこ取り-Cherry Picking」は許さないと、タフな交渉をほのめかしている。離脱交渉が何時からスタートするかが、はっきりしない現時点で、早くも双方の駆け引きが始まっている。いずれにしてもイギリスもEUも、お互いが必要であり、イギリスにもEUにも平等な恩恵が得られる様な、賢い新条約が締結できることを期待している。(了)